日常生活に生きる書写学習

― 今までの学習を活かして行書体で短歌を書こう ―

１　単元のねらい

行書とそれに調和した仮名の書き方を理解して，読みやすく速く書くこと。

２　授業の構想

⑴ 子どものとらえと資質・能力について

生徒は，国語の時間に，お互いに読み合い評価し合う学習を繰り返し行っている。そこでは，「友だちが読み，学ぶ」といった相手や目的を伝えて書かせている。しかし，生徒の文字を見ると読みやすく丁寧な字を書きたいという願いをもちながら，学習の際に，自らのノートと友だちが目を通すものや学習成果物としてのレポートで，目的に応じて意識を変えて文字を書くことができる生徒は少ない。むしろ，どの目的，どの相手でも同じ文字を書く生徒の方が多い。また，生徒は日ごろ書いている文字を自分で振り返り，「自分の文字がどのように見られているのか」「自分はその文字をどう見ているのか」「どこが課題なのか」という「メタ認知」をあまり行っていないように感じている。自らの文字を振り返る時に「私も文字をもっときれいに，丁寧に，見やすく書きたい」という関心・意欲・願いがないかぎり学習は効果的に行われない。そこで，自らの文字を振り返り，課題や良さを発見する「メタ認知」を働かせ，活動そのものに意欲的に取り組むために活動への必要性を感じられる場の設定や学習材の設定が大切になる。加えて，相互評価をすることで，他者から良いところを認められて自己肯定感が高まるようなサイクルのある単元にしていくことが必要となる。

本単元では行書を学ぶことの必要感をもたせるために，日常生活で行書を使う場面を設定し，自分の書いた文字を見直し，どう書いたらよいのかを考えさせるようにした。その上で，行書で書かないといけない「和歌」の返歌の場を設定し，生徒が書いたものをお互いに見合って評価できるようにした。決まった手本を設定せず，お互いの良さを見つけ合い，肯定的な評価がなされる活動としたい。これらの学習の積み重ねが，相手を意識し，書く文字に気を配り相手や目的に応じて文字を書くことができる子どもの育成につながっていくと考えている。

⑵ 資質・能力をはぐくむために

本題材を通して，以下の点を大切にしながら授業を展開する。

○思考の必然性を実感させる単元構成の工夫

（自らが書いた字を振り返り，課題を設定するための手立て）

生徒は，今までの生活の中で速く書いたときに，自分で自分が書いた文字が読めないという体験を何度かしたことがある。特に，自分で書く速さを決められず話す相手のスピードに合わせて文字を書く場面で起こりやすい。そのため，そのような場面をあえて設定し，自分が書いた文字を自分で振り返り，友だちが評価することにより，読みやすく書くためにはどうしたらよいのか自分なりの課題意識をもたせたいと考えている。そのことが，学習への必要感につながり，字を書くときに活かされ生活につながる能力として身についていくはずである。

○思考の必然性を実感させる単元構成の工夫(目的意識や相手意識の高まりを促す場面の設定)

行書体で書くという必然性を生徒に感じさせるためには，適切な場面を設定しなければならない。ただ，単元の中の「日常生活の場面」として「設定する電話の会話をメモしよう」で書く字をお互いに相互評価するとしたら，「読みやすい」という一点で絞られてしまい，読みやすいからよいという感想交流で終わってしまう。しかも，自分の中で完結するので仕上げるという目的意識や相手意識もなかなかもちにくい。そこで，生徒が学習した「短歌」を題材に作品として書くという時間を学習のまとめとして設定した。元来和歌は，相手の和歌に対して，その場ですぐに返歌を書き相手に渡すものであったということを踏まえて，行書体で書く必然性をもたせる。また，作品の鑑賞をするときも，和歌の風習から送り手と受け手の存在があり，受け手としてその作品をどう思うかということを鑑賞の場面で大事にしていきたい。

3　展開計画　(全３時間　本時　３／３)

次	時	主な学習と具体的な学習・内容	◇願う子どもの姿
1	1	○今までの書写学習の復習をする。 ・今まで書いた行書作品を振り返り，行書の特徴を振り返る。 ○行書の良さを考え，日常生活で活用できる場面を考える。	◇今まで学んだことや身に付けたことを言葉で表現できる姿。 ◇行書の良さや，実際に使用したらよい場面を考えている姿。
2	2	○今までの学習を活かして，日常にある場面を想定して行書体で書いてみる。 ・行書体を用いた方が便利な場面を示し，実際に行書体で書く。 ・様々な筆記具を用いて書いてみる。 ○自分が書いたものを振り返る。 ○お互いに書いたものを見合って相互評価する。 ○自分が書いた文字の課題を見つける。 ○行書体にはさまざまな書き方があることを資料や書体字典を参考にして学習する。	◇自分が書いた文字や友だちが書いた文字の課題やよさを探している姿 ◇自分にとって書きやすい行書体を探そうとしている姿
3	3	○平安時代に和歌を互いにやりとりする場面では，速く美しく書くことが一つの教養であったことを知り，行書体で和歌を書く。 ・様々な「恋」の歌から好きな和歌を一つ選ぶ。 ・行書体で，和歌を書いていく。 ・書いたものを互いに評価する。	◇学習した短歌やその資料，紹介した和歌から好きな短歌を選ぼうとしている姿 ◇和歌の語感や意味から筆記具や　書き方を考えている姿 ◇友だちの良さを発見し，書いたり課題を伝え合ったりし共に向上しようとする姿

4　授業の実際

(1) 今までの書写学習を日常生活に活かすための手立て（メタ認知について）

１時間目に，中学校に入ってからの書写学習を振り返らせた。そのことにより，学習した教材や学習した内容をきちんと言葉で表現することができた。また，行書の特徴を学習した内容に合わせて発表することができた（**図１**）。つまり，今までの学習を知識としては身に付けているということである。しかし，生徒の実態で述べたが，日常生活の中ではあまり学習したことを用いて文字を書く様子が見られなかった。そこで，次に行書の良さと日常生活で活用できる場面を考えさせ，書写の学習を生徒の日常と近づけるようにした。

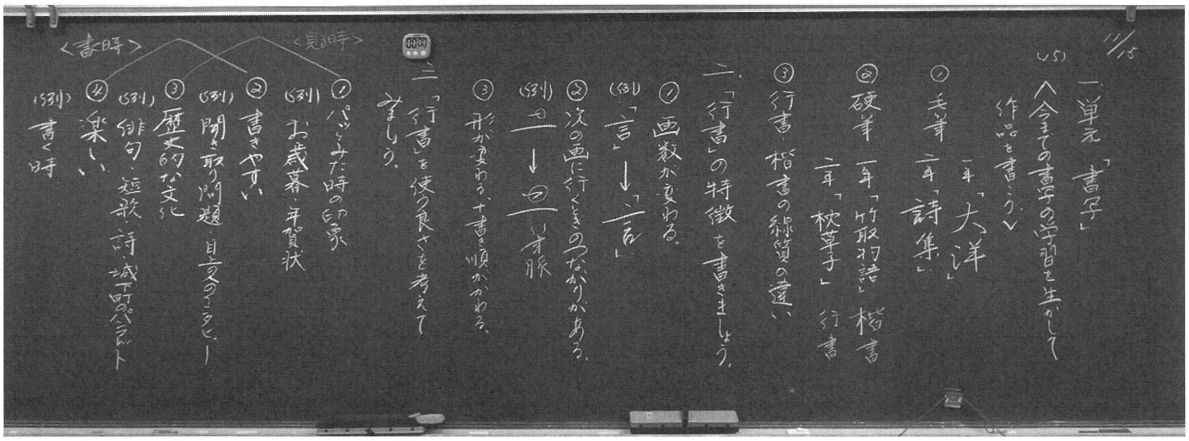

図１：第１時の板書。学習した内容を自分の言葉で表現できた。

行書の良さを生徒に考えさせると，さまざまな表現が出てきた（**図２**）生徒達にまとめさせると結果として「見る時」「書く時」に良さがあるということに分類することができた。そこで，この言葉から行書の良さが生きる場面を設定し活動した。

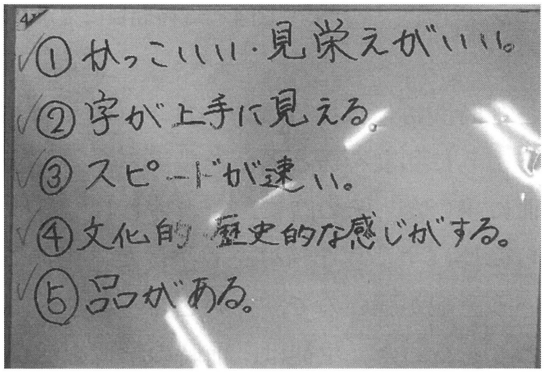

図２：良さを考えた時の班の意見

２時間目には，実際に行書の良さを活かせる場面を提示し，生徒は字を書いた。設定した場面は，「聞き取りテストを受ける場面」「電話を受け，伝言するためにメモを取る場面」「商品についての社内会議の議事録を取る場面」「観光ポスターを書く場面」を設定した。それらの場面を設定した理由は，目的意識や相手意識が違う場面であるということと行書の良さとして出てきた「書く時の良さ」「見るときの良さ」が活かせ，また，生徒が書く普段の文字が表れてくると考えたからである。これらの場面で，実際に生徒は文字を書き（**図３**），自己評価や相互評価をしながら自分が書いている文字を自分で見直す機会とした。また，生徒の意識として行書体という書体は特別なものであり，手本通りに書かないといけないという意識が強かった。そこで，その意識を変えるために，書道事典を生徒に提示し，行書体の多様性を実感できるようにした。普段書いている字を見直すこと，行書に対する特別な意識を軽減させることにより，今後の生活の中で意識したいことをふりかえりに書く生徒もいた。そのふりかえりには以下のようなものがあった。

・行書体は生活でたくさん使われていることがわかりました。次回の作品では見えていない線のつながりを意識して書きたいです。これからのテストでも行書体で書いてみたいです。
・今日は様々なケースを考えて行書で書いてみました。最後のような観光ポスターなら早く書く必要がないから，割ときれいにかけるけど，ケース１などはただの汚い字になっているので気を付けたいです。

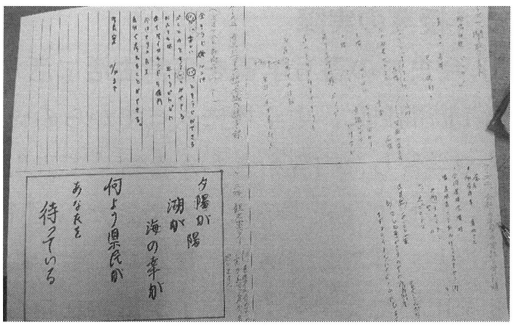

図３：２時間目のワークシート

授業後，生徒が書いたものを見ると，意識せずに書いているものの中でも学びを活かして行書体で書いている文字があった。生徒自身はそれにほとんど気付いていないようだったので，３時間目に行書体で書いている文字を抽出し生徒に紹介した。（**図４**）

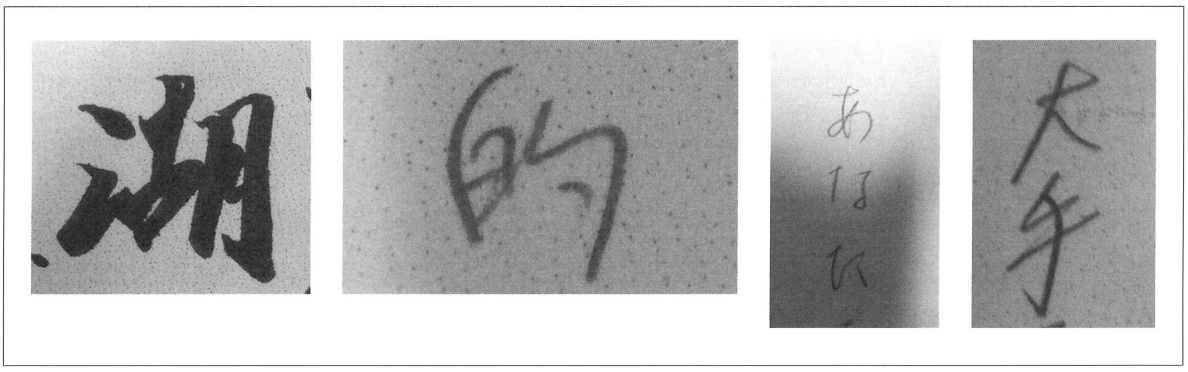

図４：３時間目に提示した，ワークシートから抽出した文字

３時間目には，行書体の良さ「書く時」「見る時」の両方を活かして，書くことを意識できるように和歌を送る場面を設定した。返歌を早く，美しく書く必要性があったことを知り，短冊に書いた。その時に，行書体として書けているところを個別に声がけをし，良いところをさらに伸ばすような指導を心がけた。生徒の実態として，「手本の通り書かないと良くない」という意識が強いので，よいところをさらに伸ばし，できるところを少しでも増やせるような関わりを行った。生徒は，前時の学習を活かして自分なりに行書の特徴を考え，工夫しながら作品を仕上げていった。生徒のふりかえりを以下に挙げる。

・今回の単元は，行書でした。久しぶりの行書でしたが「自分なりの行書」を書くことがとても楽しかったです。行書はいつものかいしょとは違って自分の字ではないような気がしてふしぎなかんじでした。
・行書体を意識して書くのは難しかったです。でも，今まで習ったことを意識して書きました。スピードをつけて書いた方が良いのか迷いました。が，スピードをつけることでより省略されると分かったので，状況に応じて使い分けたいと思いました。行書体は普段の生活の中でも使うと思うので，美しい行書体，つまり読みやすいけれど省略された行書体を目指していきたいです。

生徒にとっては，書写の授業なのに手本を提示していないということもあり，モデルがない中ではあったが，自分なりに工夫をして書くことができ，そこに楽しみを見いだすことができていた生徒もいた。授業で手本を見て書くと，うまくいかないという気持ちで終わってしまいがちだが，生徒の工夫や良さを交流できたことも含め生徒は楽しんで取り組めていたようで

あった。また，書写の授業で学んだことが，なかなか普段の生活の中で意識されないことが課題だと感じていた。書写の授業は書写の授業だけで完結するのではなく，学んだことを日常生活の中で利用して欲しいという願いのもと本単元を計画した。その上で，これからの生活の中で意識したいと書いている生徒がいたことは単元を計画したねらいを達成していたように感じる。

5　おわりに

今回の実践では，「日常生活に生きる書写学習」という面と，生徒がより主体的に学習に参加できるような「書写学習」の単元を作りたいという面から単元を構想した。生徒は「書写の学習では手本の通りに書かなければならない」という気持ちをもち，手本の通りになかなか書けないことを恥ずかしく感じているようであった。そこで，その思いを少しでも変えることを目指して行った。しかし，私自身そのような授業を構想したことがなかったので「生徒は迷わないだろうか」という不安があった。手立てとして，今までの学びが分かるような「手引き」を作成し生徒に配布した。しかし，そのような心配よりも自分が思ったように書くということを楽しんでいる生徒が多かったように感じる。その理由を探るに，「自分で選択させる」ということが大きかったのではと考えている。今回生徒が選択したのは，「筆記具」「題材」である。筆記具については，本来の意味である「用紙」に合わせて筆記具を選択するという主旨からは外れていたが，自分が使ったことのない筆記具で書くということは楽しかったようである。また，百人一首を学習しているので生徒が知っている和歌の中から好きなものを選択することで，自分の気に入ったものだからうまく書きたいという意識があったように思う。加えて，短歌の学習の続きとして行ったことが，書写の時間という特別の時間という意識をもたせることなく日常に文字を書く意識で学習に向かうことができ，字を書くことの目的をもつことができ主体的な学びにつながっていったと思う。国語の単元の中で，書写の力をつける目的で授業を作っていくのも一つの手立てだと感じることができた。今後の学習の中に取り入れていきたいと考えている。

（文責　鳥屋尾　慎人）